

## はじめに

本書は現代韓国に関する入門書である。「BTS」「愛の不時着」「パラサイト 半地下の家族」など「K-POP」「韓国ドラマ」「韓国映画」に触れたことで、「韓国」が気になったときに、最初に手にとっていただきたい。大学生はもちろん、社会人にもオススメである。特徴は3つある。

第1に、序章を含めた10の章はすべて疑問文になっていて、「どうなっているの?」「なぜ?」という読者の「知りたい」にダイレクトに応える構成になっている。政治、外交、経済、経営、歴史、社会、文化を幅広くカバーしている。特に、バイオ・ベンチャーの経営者が韓国のスタートアップ(新規企業)を論じている第4章は、他では絶対に読めない内容である。まずは「私」が関心のある章から目を通し、他の章へと読み進めることで、現代韓国の「全体像」がみえてくるはずである。著者は全員、それぞれの分野の第一人者を揃えた。尖った視点ではなく、スタンダードな知見を提供することに専念してもらった。はじめての「街」にたどり着いたときは、街全体を示す「地図」があると助かる。本書で概要をつかんだうえで、それぞれの関心にしがたって、「カフェ巡り」や「聖地巡礼」など深掘りをしていただきたい。各章の最後に厳選して示した「おすすめ文献・映画」は、次の「旅」の道標にしてほしい。

第2に、columnを10本、設けることで、章としては取り上げることができなかったトピックについても、さらに考えるための素材を提供している。本書では、研究者だけでなく、新聞のソウル特派員やライターのみなさんなどにも協力してもらった。両者とも対象を知ろうとする点では同じだが、アプローチに違いがある。特派員や

ライターは「いま、ここ」という即時性、現場性を重視する一方、研究者は「長い歴史」「他との比較」のなかに位置づけようとする傾向がある。「どちらのほうが優れているか」というマウント合戦は不毛であり、「いかに各自が強みを持ち寄ることで全体として相乗効果を出すか」というコラボレーションの姿勢や方法が問われている。そうした重層的な「知」のネットワークのなかで、読者の「私」としては、分野ごとに、誰の、どのようなテキストや動画は信用できるのか、見極めることが大切である。本書に登場する19名と照らし合わせることで、他の書き手や話し手を見定めてほしい。この「目利き」のスキルは、偽情報が行き交うなかで生死を分けるかもしれない。

第3に、工夫を凝らした索引を活用し、ラテラルシンキング(水平思考)を鍛えられるようになっていく。本書の索引は、韓国の人名・事項、キーワードそれぞれで整理されている。しかも、特定の章にしか出てこない用語よりも、複数の章にまたがって出てくる用語を優先して収録した。そのため、まず目を通した第7章(社会)にある「少子化」「非婚」が気になり索引を引くと、第1章(政治)にも同じ用語があることがわかる。このように「横に」つながる／つなげることで、関心が拡がるし、より多角的に対象に迫ることができる。

本書は「向きあう」を書名に掲げている。いつしか好きになったり、嫌いになったりしている人や、何がなんだか訳がわからない事柄について「知る」ためには、「私」自身の<sup>インタレスト</sup>関心＝利害や価値観、さらには経験すらも突き放して、一定の距離をとることが欠かせない。これまで「当たり前だと思ってきたこと(taken-for-grantedness)」が揺らぐとき、恐怖を感じるが、同時に「私」と世界が共に改まる過程が始まる。それこそが、センス・オブ・ワンダー、学ぶ<sup>たの</sup>楽しみである。

2024年8月

浅羽 祐樹